

書評 良き社会のための経済学

ジャン・ティロール (著)、村井 章子 (翻訳) 日本経済出版社

飛田 史和¹

Book Review: “Economics for the Common Good” by Jean Marcel Tirole

Fumikazu Hida

経済学は何の役にたつか？

経済学の長所は、不確定な人の行動に関わる社会科学の中において、何が検証できるか否かを明確にし、数理化によって検証を試みていることである。(時に功利的と批判されることもあるが) その有用性を評価し、経済学は「社会科学の女王」と呼ばれることがある。もっとも、実体験と抽象的思考(想像力)に乏しい最近の学生に「経済学は有用である」と説明してもなかなか理解されない。ともに兼ね備えた現代ビジネス研究所員に一読をお勧めしたく紀要に投稿した所以である。

良き社会のための経済学 ジャン・ティロール (著)、村井 章子 (翻訳) 原題(仏語): *Économie du Bien Commun* (英題 *Economics for the Common Good*) は、人々が共通に追及する幸福 (Common Good (共通善)) のために、経済学はどう貢献できるか (経済学の有用性) を、第1部「社会と経済学」、第2部「経済学者」、第3部「経済の制度的枠組み」、第4部「マクロ経済の課題」、第5部「産業の課題」の5つの視点から解き明かしている (ちなみに共通善 (Common Good) を「良き社会のための」と表題で意識したのは、なかなかうまい訳だと思う)。

共通善のための処方箋を提示

ティロール教授は、「市場の力と規制に関する分析の功績」により 2014 年にノーベル経済学賞を受賞している。専門である産業組織論に限らず、規制政策、組織論、ゲーム理論、ファイナンス、マクロ経済学、経済と心理学などの分野で、学者とネットワークを持ち共同で第一級の論文および著作を公表しているという (北村行伸一橋大教授による本著巻末の「解説」による)。

本著は、優れた現状評価と洞察力を併せ持つ卓越した経済学者による、経済社会への comprehensive かつ consistent な処方箋である。

¹ 昭和女子大学グローバルビジネス学部ビジネスデザイン学科教授、現代ビジネス研究所副所長

本著は、経済の広範な分野において、鋭い分析、課題の抽出を行っており、すべてを照会することはできない。以下に評者が共感を覚えた2箇所を紹介する。

自由放任か計画経済か？（不毛な二元論を排す）

競争は生産性を改善する。1990年代になってEUの貿易自由化が進んだ結果、日本に比べて遅れていたルノー、プジョー=シトロエン（フランスの自動車産業）の生産性は劇的に改善された。また2001年の中国のWTO加盟は、中国経済の国際化だけでなく、世界中の繊維産業のイノベーションと生産性が大幅に向上した。

一方で競争は常に望ましいとは限らない。ティロールはフランスの鉄道のを引き、重複投資によりコスト増をもたらすと警告する。「重要なのは競争が利用者に資するものでなければならないことである。競争がライバルを遠ざけようと画策する事業者のあさましい行為で歪められてはならない。（中略）そうなるように監視することが競争法の本来の趣旨である（本著 pp401）。

ウーバーについてどう考えるべきか？（本著 pp460）

欧米で利用が進んでいるウーバーについて、フランスでは導入に対する賛否の対立が激しい。ここでもティロールの立場は共通善の追求という点で一貫している。

ウーバー導入がイノベーションであることは誰も否定できない。①あらかじめ登録したカードによる自動決済、②ドライバーも乗客もお互いに評価される、③GPSによる乗車前・中のルート確認、時間帯による料金変動制 などである。フランスのタクシー供給量が少ないことを考慮すれば消費者余剰の増大は計り知れない。

一方で既得権益者への配慮が必要なことも指摘される。競争における平等のために、①新規参入のウーバーが社会保障税と所得税を（既存のタクシー業者と同等に）課されているかが検証されなければならない。また、過去のタクシー免許交付が高額（有償）で転売されていることを考えれば、補償をしなくて良いという結論にはならない（この論点は日本においても、携帯電話の周波数割り当てや電波オークション、古くは電話施設権（固定電話債券）、テレホンカードなどの問題点にもつながる）。

本著は「みんなのしあわせ（＝共通善）を目的として、社会の諸問題を解決する処方箋として経済学をどのように活用するべきか」を示したものである。評者は、本著を読むのに際し、特別の準備や専門知識を必要としなかった。著者も「広い範囲の読者に読んでもらえるよう著述した」旨自ら述べている。平易でありながら、読めば読者を再考させる含蓄を含んでいる。厚さ（616ページ）に躊躇しないでぜひ一読を勧めたい。